

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

## 1. 研究課題

インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に

Evolution of the Indian Ontology in the Cyclic Image: Focusing around the Development Process from Ritualistic Thoughts to Philosophical Views

## 2. 研究代表者氏名

手嶋 英貴

TESHIMA, Hideki

## 3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(3年目)

## 4. 研究目的

紀元前一千年紀以来、インドでは「人間などの生命体が生と死を繰り返す」あるいは「世界が発生と消滅を繰り返す」といった循環的イメージに基づく存在理解の方法が発展してきた。とくにインドの「人間観」を代表するものとして、業の理論と結びついた輪廻説がずっと知られ、またインドの「世界観」を代表するものとして世界の反復的な生滅を説くユガ説が有名である。そして、これに類する存在理解の方法は、ヒンドゥー教や仏教の伝播によって、日本を含むアジアの多くの国や地域に大きな文化的・社会的影響を及ぼした。そうしたインド的思想の基礎には、存在の様態を「循環的なイメージ」で捉えようとする共通の思考がみられる。しかし従来の学界では人間観と世界観とを個別に研究することが多く、それらの相互関係に目を向けることが少なかった。本研究はこの共通的思考を「循環的存在論」と名づけてその発生・展開のプロセスを明らかにし、かつ南アジア、東アジア、および東南アジアで共有される社会的・文化的基盤について、新たな視野を開こうとするものである。

Since the first millennium BCE, Indian people have developed viewpoints for understanding how the world and living things exist, especially involving a cyclic image, such as viewpoints that "the world repeats its emersion and destruction forever" or that "all living things are in a continual cycle of birth and death." From those, they have yielded the methodology of "reincarnation" based upon the notion of karmic retribution, as well as that of "cosmological cycle of four Yugas" apparently inspired by periodicity of the natural world. The former is the representative methodology regarding living (including human) beings, and the latter concerning the world which encompasses the lives. Cognate thoughts about the way of existence were spread to many Asian countries/regions by dissemination of Buddhism and

Hinduism which functioned as conveyors of Indian thoughts, and, subsequently, culture and society of each countries/regions including Japan were deeply influenced by them. The "cyclic image" upon which the thoughts in question are commonly based, however, has been paid little attention by scholars, because of the tendency that they explore both the methodologies, of existence of living things and that of the world, separately. In this research project, we attempt to clarify what was the process of emersion and evolution of the "Indian ontology in the cyclic image," in which both the types of methodology are meaningfully integrated and related to each other. This research will provide fresh insights into the socio-cultural basis common among South, East, and Southeast Asian countries/regions.

## 5. 本年度の研究実施状況

今年度は月例研究会を 12 回開催した。各回は「輪読の部」および「個人報告の部」で構成された。班員が順にレポーターを担当する「輪読」では、研究課題「インドの循環的存在論」の形成に直接かかわる『ヴァードゥーラ・シュラウタースートラ』新月満月祭の章を読み、その具体像を検討した。また「個人報告」では、研究班の課題を各報告者の専門性と結び付け、多角的な検討を行った。とくにヴェーダーンタ学派などインド哲学の諸派で循環的存在論がどう展開され、かつそれが祭祀文献に見られる観念とどう結びついているかを、研究会の場で検討した。その成果はシンポジウムで公開された（次項「6」参照）。研究会は全て対面・オンライン併用型で開催し、参加者は平均して 20 名ほどであった。研究会の録画映像を YouTube で限定公開し、各回の平均視聴数は 15 回ほどである。なお、2026 年度内に公表を予定している電子版の研究成果論集（後出「13」参照）の実現に向け、寄稿者の募集、京都大学機関リポジトリ「紅 (KURENAI)」管理部門との交渉、具体的工程の取り決めなどを行った。

## 6. 本年度の研究実施内容

- 2024.4.27 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 22 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1-7（新月満月祭本祭・Sāmidhenī）を中心に（輪読と報告）発表者 井狩 彌介 京都大学
- 2024.5.24 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 23 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1-17（新月満月祭本祭・āgārau）発表者 手嶋英貴 龍谷大学 Pañcavārṣika（漢訳「五年大會」）の語義：Max Deeg 説の再検討 発表者 手嶋英貴 龍谷大学
- 2024.6.28 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 24 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.18-36（新月満月祭本祭日・祭官選任儀礼ほか）発表者 西村 直子 東北大学大学院 Vādhūla-Śrautasūtra 第 9 章（Vājapeya 章）の研究：灌頂部分を中心に 発表者 坪田 さより 日本学術振興会/東北大学大学院

- 2024.7.26 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 25 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.18-37 (新月満月祭本祭日・祭官選任儀礼ほか) 続き 発表者 西村直子 東北大学大学院 Mitra 神と乳製品について 発表者 都築 みのり 大阪大学大学院博士課程
- 2024.8.23 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 26 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.37-55 (新月満月祭本祭日・アージュバーガ、アグニへの献供ほか) 発表者 伊澤 敦子 中央大学 アシュヴァメーダにおける灌頂儀礼の変遷 発表者 手嶋英貴 龍谷大学
- 2024.9.28 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 27 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.37-56 (新月満月祭本祭日・アージュバーガ、アグニへの献供ほか) 続き 発表者 伊澤 敦子 中央大学 ヴェーダ語における pra-yam の語義, 分布, 補完パラダイムについて 発表者 尾園 絢一 広島大学大学院
- 2024.10.25 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 28 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.56-78 (新月満月祭本祭日・Agni-Soma、Indra-Agni への献供ほか) 発表者 堂山 英次郎 大阪大学大学院 イスラム圏における魔術・占星術と神学の伝統 発表者 中西 悠喜 大阪大学
- 2024.11.29 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 29 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.56-79 (新月満月祭本祭日・Agni-Soma、Indra-Agni への献供ほか) 続き 発表者 堂山 英次郎 大阪大学大学院 ラーマチャンドラとバラバドラー梵蔵バイリンガル資料と伝統文法学 発表者 菊谷 竜太 高野山大学
- 2024.12.20 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 30 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.79-2.6.1.21 (新月満月祭本祭日・イダーの招請ほか) 発表者 大島智靖 東京大学 『マヌ法典』第 1 章における二つの創成説 (cosmogony) 再考 発表者 吉水 清孝 公益財団法人東洋文庫
- 2025.1.30 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 31 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.5.1.79-2.6.1.22 (新月満月祭本祭日・イダーの招請ほか) 続き 発表者 大島 智靖 東京大学 ジャータカの動物譚 発表者 中村 史 小樽商科大学
- 2025.2.28 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 32 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.6.1.22-41 (新月満月祭 prāśitra-pariharaṇa, santatihoma ほか) 発表者 竹崎 隆太郎 東京大学大学院博士課程 Viśvarūpa Viṣṇu 像について—現存作例の調査から 発表者 大木 舞 京都大学大学院
- 2025.3.21 インドにおける「循環的存在論」の形成 第 33 回研究会 Vādhūla-Śrauta-Sūtra 2.6.1.22-42 (新月満月祭 prāśitra-pariharaṇa, santatihoma ほか) 続き 発表者 竹崎 隆太郎 東京大学大学院博士課程 人は何のために祈るのか —新ニヤヤ学派ジャヤデーヴァの吉祥祈願論— 発表者 柴 優人 広島大学大学院博士課程

2025.3.28 公開シンポジウム「インド思想史におけるヒンドゥー法典の意義」（ブラフマニズムとヒンドゥイズム第11回シンポジウム） 内なる証人の思想的系譜—ウパニシャッドから『マヌ法典』、シャクンタラー物語へ 発表者 手嶋 英貴 龍谷大学 指定コメント コメンテーター 眞鍋 智裕 北海道大学大学院 『マヌ法典』第1章における二つの創成説（cosmogony）再考 発表者 吉水 清孝 公益財団法人東洋文庫 指定コメント コメンテーター 高橋 健二 東洋大学 ユガの循環と逡巡するダルマー叙事詩、法典の「子供」、そしてその先へ 発表者 谷口 力光 名古屋大学 指定コメント コメンテーター 沼田 一郎 東洋大学 アガスティヤ仙とガネーシャの南下、神格の混淆と発展について 発表者 斉藤 茜 オーストラリア科学アカデミー 指定コメント コメンテーター 井田 克征 中央大学 シヴァダルマ文献における牛の聖性 発表者 横地 優子 京都大学大学院 指定コメント コメンテーター 高島 淳 東京外国語大学

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

インド循環的存在論の発展過程を解明する上で重要な法典に焦点をあてたシンポジウム「インド思想史におけるヒンドゥー法典の意義」を以下の概要で開催した。ここでは、古代祭祀文献ヴェーダに置いて形成された循環的存在論が哲学諸派、さらには文芸諸作品にどんな影響を及ぼしたかを、とくに法典文献の媒介的役割に着目して論じた。これは従来の学界で見過ごされてきた視点であり、シンポジウムを通じて法典の思想史的プレゼンスの大きさを確認することができた。

日 時： 2025年3月28日（金）10:30-18:00

場 所： 京都大学文学部校舎2階 第3講義室

形 式： 対面・オンライン併用

参加数： 約160名（対面80名、オンライン80名）

## 8. 研究班員

所内

岩城卓二

学内

天野恭子(文学研究科)、横地優子(文学研究科)、大木舞(文学研究科)

学外

手嶋英貴(龍谷大学法学部)、高島淳(東京外国語大学)、中村史(小樽商科大学商学部)、梶原三恵子(東京大学大学院人文社会系研究科)、堂山英次郎(大阪大学大学院人文学研究科)、西村直子(東北大学大学院文学研究科)、川村悠人(広島大学大学院人間社会科学研究科)、尾園絢一(広島大学大学院人間社会科学研究科)、伊澤敦子(東京大学文学部)、大島智靖(東京大学死生学・応用倫理センター)、虫賀幹華(大阪大学大学院人文学研究科)、山城貢司(東京大

学先端科学技術研究センター)、塚越柚季(東京大学大学院人文社会系研究科)、眞鍋智裕(北海道大学大学院文学研究院)、菊谷竜太(高野山大学文学部)、矢野道雄(京都産業大学)、井田克征(中央大学総合政策学部)、高橋健二(東洋大学文学部)、谷口力光(日本学術振興会)、坪田さより(日本学術振興会)、吉水清孝(財団法人東洋文庫)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	1	4 (3)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	36 (28)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)
国立大学 (内女性)	6	13 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0)	0 (0)	122 (0)	0 (0)	0 (0)	20 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	5	5 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	48 (0)	0 (0)	8 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	1	2 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	20 (10)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)
民間機関 (内女性)	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	15	26 (4)	0 (0)	1 (0)	4 (2)	0 (0)	239 (38)	0 (0)	8 (0)	37 (17)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数 0 とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	Cracow Indological Studies	1	2024.6	Cannibalism in the dikṣā Chapter of the Maitrāyaṇī Saṁhitā	Kyoko Amano
2	北海道大学文学研究院紀要	1	2024.7	ヴェーダの規範に従う「善人」の輪廻について：マドゥスーダナの著作『隠された意味の顕照』に見られる事例から	眞鍋智裕
3	南アジア古典学	1	2024.7	神へのバクティは何を契機とするのか	眞鍋智裕
4	真宗文化	1	2024.7	ヴァーージャペーヤ祭における灌頂儀礼－Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に基づいて－	坪田 さより

5	ISHIKAWA kan (ed.). Aspects of the Literary Sources in South Asian Historical Studies. Tokyo: Toyo Bunko.	1	2024.12	Brahmanical Views on the Social Class of a King: Translation of the Avesti Section of the Tantravarttika and the Rajasabdarthaprakasa Section of the Viramitrodaya	YOSHIMIZU Kiyotaka
6	密教文化	1	2025.1	聖仙たちの言葉	川村悠人
7	印度民俗研究	1	2025.3	ヒンドゥー教の葬祭 と死生観—『葬祭の 光明』訳註（1）—	虫賀幹華

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書  
なし

12. 博士学位を取得した学生の数  
1（学外1）

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の成果のうち、『ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ』の新校訂テキストおよび和訳は、京都大学機関リポジトリ「紅 (KURENAI)」を通じて電子テキストとして公開する。また研究論文も、同リポジトリで電子版研究論集として公開する（寄稿者は班員および研究会参加者のうち10名程度となる予定）。それらのコンテンツは、2025年度末（2026年2月～3月）にリポジトリ管理部署へ完成版PDFファイルを引き渡し、その後リポジトリ収録のための各種確認や承認を経て、2026年度内にウェブ公開することとなる。なお、2023年度シンポジウムで好評を得た『マハーバーラタ』の最新研究を広く公開するために、専門家と一般人の双方を読者として想定する書籍を、2026年前半に株式会社法蔵館より刊行する。